

常<sup>つね</sup>  
石<sup>いし</sup>  
勝<sup>かつ</sup>  
義<sup>よし</sup>

もう一度、  
大好きな馬と夢を掴みたい  
↳ 高次脳機能障害を乗り越えて



## プロフィール

一九七七年生まれ。一九九三年に日本中央競馬会競馬学校入学、一九九六年にJRA騎手デビュー。一九九七年、小倉三歳ステークスGⅢ優勝、二〇〇三年、国際招待中山グランドジャンプレースGⅠ優勝、同年関屋記念GⅢ優勝。二〇〇四年八月に小倉競馬場にて落馬負傷し、一か月の意識不明の重体となり、二〇〇七年二月に引退。同年八月にハーフマラソン出場。二〇〇八年四月から競馬を取材し、コラムの連載開始。パラリンピック馬術競技へ挑戦するため、二〇一五年から本格的に乗馬クラブへ通い始め、ドイツでもトレーニングをする。

○司会 皆様、本日はご多忙の中、講座「生きること」にご参加くださりまして、誠にありがとうございます。それではただいまより二〇二一年度講座「生きること」の第一回目を始めさせていただきます。

まずは常石さんが出演されている映像を二本ご覧いただき、その後、ご本人にご登場いただきまして、いろいろなお話をさせていただきたいと思えます。

(VTR映像二本上映)

○司会 それでは早速ですが、本日の講師であります常石勝義さんにご登場いただきたいと思えます。皆さん大きな拍手をもってお迎えください。(拍手)

(常石さんが聖火ランナーの衣装を着て、聖火トーチを掲げながら登場)

○常石 勝義 皆さんこんにちは。枚方は寛平マラソンで四十二・一九五キロを走って、かなりしんどかったって思い出があるのですが、今日は聖火トーチを持って走ってきました。大勢の方が拍手で迎えてくれたので、パワーアップして次のステージで灯すことができます。皆さん、右手を上げてください。用意はいいですか。トーチキスをします。灯りましたか。今日はよろしくお願ひします。

○司会 よろしくお願ひします。それではここで、本日お招きいたしました常石勝義さんのプロフィールをご紹介させていただきますと思います。

常石さんは、一九七七年八月二日、大阪府泉南郡岬町のご出身で、元JRA日本中央競馬会の

騎手でいらっしやいます。一九九六年デビューで、同期には、今年の日本ダービー（GI）をシャフリヤールで制した福永祐一騎手や、テイエムオペラオーの主戦ジョッキーである和田竜二騎手などがおられます。

一九九六年と二〇〇四年のレース中に二度の落馬事故に遭われました。一度目の落馬事故の後には、驚異的な回復を見せて翌年レースに復帰され、同年の小倉三歳ステークス（GⅢ）でタケイチケントウという馬に騎乗し、重賞初制覇を成し遂げられました。その後、二〇〇三年には関屋記念（GⅢ）をオースミコスモという馬で、そして、中山グランドジャンプ（GI）をビッグテーストという馬で制し、GI初勝利も達成されました。

しかし、二〇〇四年に再び落馬、意識不明の重体となりましたが、約一か月で奇跡的に意識を取り戻されます。そして再び競走馬に騎乗するべくリハビリ等に励まれますが、落馬による度重なる脳挫傷の影響で、高次脳機能障害と診断され、左半身をうまく動かせなかつたり、判断力が低下したり、集中力や注意力が持続しない、直近の出来事が覚えられないなどの後遺症が残ってしまったために、二〇〇七年に騎手を引退されました。

その後は、競馬評論家や競馬ライターとして活躍されていますが、障害者馬術競技と出会ったことにより、もう一度大好きな馬に乗って「パラリンピック」という大きな舞台を目指したいという新たな夢や目標に出会うことができました。

東京オリンピック・パラリンピックへの出場は叶いませんでしたが、現在は次の目標である、

フランスのバリパラリンピックに向けて、兵庫県明石市の乗馬クラブにて、練習を積み重ね、国内外の大会等に出場されていらっしゃいます。

本日は常石さんに、ご自身の騎手時代の思い出とか、二度の落馬を経験されて感じたことや思い、また障害者馬術競技に出会えたときのお気持ちや、今後の夢などについて、お話しいただきたいと思っております。

そうしましたら、常石さん、どうぞよろしくお願いいたします。

○常石 勝義 よろしくお願いたします。

私の名前は常石勝義です。今日はよろしくお願いたします。こんな感じで手話ができます。あとはなかなかできないですね。

中学校三年生のとき、身長が一四五センチしなくて、体重は三十五キロしかなかったんですね。兄はすぐでっかくて身長が一八五センチあるんですよ。わたしはちっちゃかったけど、小学生のときにラグビーをし、中学校のときは、バスケットボールをやったんです。やっぱりメンバーがでっかい人ばかりなので、いつもぶっ飛ばされていたんですが「くそう、私もでっかくなるぞ」って、必死で練習しました。そんなときに兄が「小さいお前にしかできないスポーツがあるぞ」と教えてくれたんです。それがちょうどオグリキャップ号という馬が走って、武豊騎手がデビューしたぐらいの、競馬が盛り上がったときだったので、兄は知っていたんです。「実際、お前だったらなれるから、なれ」って言われて、それで僕は高校をどうするかという中学三年生

の時期に、すごく迷ったのですが、競馬学校を受験しました。一次試験がすごく厳しくて、難関だからお前には無理だろうと言われていたのですが、なぜか受かってしまった。二次試験がちょうど中学校の体育祭と重なるときでした。組体操でちっちゃい僕が一番上なんです。うれしくて、組体操をやったのですが、中学校のメンバーが「てっぺんの代わりはいっぱいいいるけど、競馬学校の受験はお前しかできないから、絶対に行け」、「もし試験を受けなかったら、このクラスに入れないからな」って言われ、背中を押してくれたんです。それで合格通知が来たとき、「ええっ、うそ」と思ったんですけど、すごくうれしかったです。

わくわくしながら競馬学校の門をくぐったら、うれしさもなくなるくらい、競馬学校は、とても厳しかったです。僕は甘いものが大好物なんです。「甘いものは絶対あかんからな」と言われていましたが、こっそり送ってもらった飴を口に入れた瞬間に、教官に見つかってしまって、すぐに没収されてしまいました。

毎朝体重を量ってから、ご飯を食べるのですが、四百グラム体重が重いつて言われただけで、その日一日は馬に乗ることを禁止されて、馬の世話をいろいろする作業ばかりで、とりあえず減量しろと言われて、厳しかったですね。

騎手になってから武豊さんに「今何時ですか」と聞いたたら、「八時から調教をして、八時二十分に上がったから、八時半くらいかな」って言われたのですが、本当に数分のずれもなかったんです。体内時計が本当にきっちりできるからレースにも強いんですよ。

東京パラリンピックの陸上競技四百メートルと一五〇〇メートルで金メダルを取られた佐藤友祈選手は、マーティン選手の後ろにぴったりつけ、最後の百メートルでラストスパートを仕掛け、すごいスピードで追いつけてきました。体内時計を用い、ペース配分をされていました。

皆さん、手首を握ってみてください。これで百グラムの体重の差がわかるんです。朝起きてこうやって握った瞬間に自分の体重が分かるようになるんです。これは武豊さんに教えてもらったんですが、ダイエツトに役立つのでぜひ試してみてください。

僕の競馬学校は、福永洋一さんというすごい騎手の息子、祐一騎手や、和田騎手とか競馬関係者の息子がほとんどだったので、みんなすごく乗馬が上手でした。私は競馬を見たことも乗ったこともなかったのですが、早くみんなと一緒に乗りたいなと思って、いつも私は長いロープに繋がれた馬に飛び乗る練習をすごくしました。飛び乗る練習だけで、その日は終わりという日もありました。

やっとなんたと一緒に乗れるっていう日が来たときはすごくうれしかったです。僕の同期は女子もいたんですけども、みんな本当に仲良く助け合い、時間外でもトレーニングをしました。あるとき、こっそり競馬学校を抜け出して、仲間とコンビニに行ったのですが、その帰りに教官が草むらで待ち伏せして見て見つかってしまい、「何しているんや」と言われて、お菓子の袋とか持っていたので、もう言い訳することができなかつたです。

一日も早く皆と一緒に馬に乗って、広い馬場を走りたかつたから、必死にトレーニングをし

した。とつても厳しかったですが、できることが増えていくと、うれしくてすごく楽しかったですね。僕はトレーニングを頑張ったので、卒業式のときには努力賞を受賞しました。そしていよいよ花の十二期生が騎手としてデビュー。憧れの武豊騎手とゲートで並んだときは緊張とワクワクでほとんど覚えていません。そのあとも順調に勝ち上がっていくことができたのですが、六月で十六勝して新人賞争いだと思った矢先に落馬。脳挫傷で遠くに小倉祇園囃子のお囃子が聞こえるような感じで眠っていました。懸命にリハビリをして、平成九年一月に復帰でき、夏の小倉で小倉三歳ステークスというGⅢレースを勝つことができたのですが、私が休んでいる間に、同期はすでにGⅠレースを勝っていました。仲間だけドゲートに入るとライバルです。私も負けられないと思って、騎乗の幅を広げようと思って障害競走にもチャレンジしました。

障害競走の馬は、丸太を跨ぐことから始め、一つひとつ教えていき、自分で馬を作っていくので面白いです。馬って一本の丸太を跨ぐことも、最初はできないです。馬はすごく怖がりな動物なので、一本の丸太を跨ぐことがすごく大変なんです。けれど、そういうところから始めていって、ジャンプレースで待望の中山グランドジャンプというGⅠレースに勝つことができました。ゴール寸前にこぶしをこうやって上げてしまったので、中央競馬会の方に「ちょっとこぶしを上げるのは早いな」って注意されました。レースが終わって、帰りのタクシーに乗った瞬間に、調教師の先生に電話で「先生やりました」って報告したら、先生が「よくやったな」って、「本当に強かったな」と言ってくれ、それを言われた瞬間に電話越しで、涙が出てきましたね。

その後はデビューから乗せてもらったオースミコスモ号で関屋記念GⅢを勝って、さあこれからって勢いをつけた瞬間、二回目の落馬。二度目は「命はない」って言われていたので、「もし命を取りとめたとしても、植物状態となることを覚悟してください」ってお医者さんから言われました。約一か月の昏睡状態から少しずつ目覚め、最初は話すこともできなかったけれども、筆談で少しずつ会話をして、自分の乗った馬に誰が乗るのかなど書いていたそうです。立つこともできなかったけど、伝い歩きから少しずつ走れるようになり、毎日一時間歩いて馬に会いに行き、復帰を目指しました。だけど、ドクターから「高次脳機能障害が残っていて、判断能力の低下や視野欠損、集中力低下などがあるため、大きな馬を乗りこなすことはできないので、もう騎手は引退」って言われてしまいました。ドクターからそう言われたので、もうどうしようもないですね。

無念の引退を決意。夢遊病状態になってしまいました。そんなとき、馬から魔法の言葉ももらいました。「つねちゃん、はよ馬に乗らな」とハッパをかけられました。俺には馬しかないんだ。エネルギーをもらい、リハビリで乗馬を始めました。乗っているだけではもったいない、競技にも出たいと思い、障害者乗馬を始めました。そんなとき、日本でオリンピック開催が決まり、ここへ行くしかない。形は違っても俺は馬乗りだから、俺のGⅠを取る覚悟で挑みました。しかし、パラリンピック障害者、馬場馬術競技選考のためにドイツやオランダへ行きましたが、あと一歩届かなくて代表にはなれませんでした。大会一日目は「よっしゃ」って気合を入れて挑み、現地

のトレーナーにも褒められ完璧な演技ができたのですが、二日目に臨んだとき、途中で迷いが出て、四湾曲のステップを間違ってしまった。まだまだ未熟で甘かったです。ヨーロッパは乗馬大国です。障害者も健常者もみんな同じなんです。

とても厳しくて、七十%以上の演技を取らないと世界と戦っていけないのですが、乗馬の大会は馬の競技なので、決められたコースを常歩、速歩などの歩き方に変化をつけて、十メートルの輪乗り、S字乗りなどを正確に演技していくんです。

また、決められたポイントを通過しないと減点になってしまいます。皆さんにわかりやすく言ったら、スキップ・ツイステップみたいに歩き方に変化をつけて、きれいに演技をするということがすごく大事なんですよ。私は記憶障害があるので、経路と言って馬を歩かせる順番や図形が覚えられなく、悪戦苦闘の日々です。やっぱり脳で覚えるのではなくて、五感を使って覚える。五感なので書くことと声に出しながら歩く、そうしたらだんだん覚えられるようになってきました。が、すごく時間がかかるんです。やっと覚えたと思っても時間が経って、寝てしまったら、またすぐに忘れちゃうんです。寝ても覚えているようにするのは、すごく時間がかかって難しかったです。そんな自分が悔しくて、自分自身が歯がゆくて、心が痛く無気力になってしまいました。

パラリンピックを目指するために、「おかん、ここは俺の家やな。ここを売って馬を買って欲しい。絶対頑張る」って約束したんです。パラリンピックは自馬を持たないと戦えないんです。大会用の馬をドイツで六年間リースしたので、莫大なお金がかかってしまい、騎手時代にG Iレー

スで勝った賞金等をはるかに超える経費を無駄にしまいました。

ドイツに行く前に、トレーナーと勝手な行動はしないって約束をしたのですが、フランクフルト空港に着き、レンタカーの手続きをしている間に、何度も来ているので大丈夫だと思って、勝手にトイレに行つて迷子になってしまいました。パニックになりトレーナーを探したのですが、見つからずにそのままフランクフルト空港で七時間もうろろしていました。それで一人で牧場に行こうと思つて、鉄道に乗ろうかなと思つた瞬間に、兄から電話があつて、「牧場なんか行けるはずがないだろ、すぐホテルに帰れ」って言われ、ホテルに帰つてトレーナーを探したら、ばつたり会つてすごうれしかったです。本当に約束を守る大切さを痛感しました。「ライダーである前に一人の人間になれ。馬との信頼関係もなくしてしまうぞ」とトレーナーにも注意されました。障害のせいにする、ずるい自分がいて「ちよつとくらいならまあいいか」と思つて、自分に甘いんですよ。失敗をプラスにして大人としての自覚と責任を持つて生きたいです。

「乗馬は怖くないのですか」、「何で馬に乗るのですか」つて、よく聞かれるのですが、私は馬に乗ることしかできません。馬から命とエネルギーと生きる証をもらい、命丸儲けしました。自分一人だったら駄目でも、馬と一緒に頑張れる。会話するのがとっても楽しいんです。私のベストパートナーです。しかし、ともに挑んだ愛馬に迷惑をかけてしまった。この借りをきつと返すと気を引き締めましたが、今何ができるのか、何をしたらいいのか、ゼロからのスタートです。

今年二月に調教師を引退した角居元調教師が石川県珠洲市の農園を借りて、そこでゆっくり過

ごして「馬の余生を守りたい、馬の終の棲家になりたい」と言って、馬のいる町として地域の子どもたちと触れ合いながら、地域活動や地域活性化に力を入れているのですが、思い切ってそこを訪問し、そこで体験修行させてもらいました。

ドリームシグナルっていう馬は、もう十六歳なんですけど、現役時代はシンザン記念という大きいレースに勝って、有名な馬だったんです。背中を痛めたようで、人が乗れなくなったので現役を引退したんです。そういう馬を角居元調教師は丁寧な世話をし、ちゃんと乗れるようになって、馬の目の輝きも変わってきたんです。珠洲市の鉢ヶ崎海岸ということで、毎日運動して地域の子どもたちと一緒に、海岸のゴミ拾いなんかをしながら、馬と触れ合ったり、馬に乗ることで子どもたちの笑顔が飛び出し最高です。私もその活動に参加させていただき、みんな自然体で付き合える快感を覚えました。人も動物も自然も共存していくことが大事なんだなって感じました。この体験で折れた心が復活し、痛みがなくなりました。

パラリンピックへの夢を持ち、挑んだことは、私の大きな財産です。一人では無理だって言われた渡航もできて、愛馬のためにニンジンも買い、ピザを買いに行くこともできました。英語もドイツ語もしゃべれないのですが、やる気になったら何だってできるんだなと思いました。五感で覚えたことは絶対忘れないと思います。おかんの年まで、まだまだ諦めずに挑戦したいと思っています。二度目の落馬で自分が誰かも、おかんのことも分からなかったけど、馬のことだけは絶対に忘れていなかったです。馬から魔法の言葉ももらいました。私は障害者って言われますが、

障害があるからパラリンピックに挑戦できる自慢の個性です。迷惑をかける度に、感謝の気持ちを込めて「ごめんなさい」ではなく「ありがとう」と言います。皆さんも自分の個性を自慢して、「ありがとう」がいっぱいになったらいいですね。

コロナ禍での異例の開催となった東京オリンピック・パラリンピックですが、関わってくださった関係者の尽力に感謝しています。一瞬の挑戦に命を懸け、全力でぶつかっていく姿に、熱くなりました。強い心と感動と諦めない勇気を届けてくれたパラリンピアン皆さん、ありがとうございます。お疲れ様でした。私も体幹トレーニングと脳トレをもっと強くなっています。「よっしゃ、バッキンガム宮殿に行くぞ」。全力でぶつかり、夢はでっかく追いかける、絶対に諦めない、夢は無量大です。聖火の火は消えたけど、私のトーチに灯した証は残っています。だから次のステージに挑むことができます。勝っても負けてもたくさんの人と出会い、経験できたことは宝物です。三日間の監禁、そしてPCR検査。陰性でも二週間の自粛生活で、一歩も外に出られなかったのも、やっと自由になり今日は皆さんといっぱい交流ができ、気分最高です。

元気になる歌と一緒に歌ってみてください。「あめあめ ふれふれ かあさんが」という歌の替え歌ですが、「ピッチ・ピッチ・チャップ・ランラン」を「ピンチ・ピンチ・チャンス・チャンス・ランラン」に替えています。僕はピンチをチャンスだと思って、この歌でいつも元気になっています。

一度皆さんも歌ってみてください。「ピンチ・ピンチ・チャンス・チャンス・ランラン」

今日は皆さんにお会いでき、うれしかったです。ありがとうございます。

(拍手)

○常石 勝義 やつと覚えたドイツ語で、ダンケシエーン。ありがとうございます。

○司会 常石さん、ありがとうございます。競馬という常に怪我と隣り合わせのスポーツで戦ってこられたことや、そのときのエピソード、それと高次脳機能障害という障害を負いながらもパラリンピック馬術競技という新たな目標を見つけたときの思いとか、それにとどまらず、いろんなことにチャレンジしていくという、前向きな姿勢を皆様にお伝えできたのではないかと思います。

それではせっかくの機会ですので、常石さんに何かご質問のある方いらっしゃいますでしょうか。

○質問者A 大変な事故をされましたが、落ち込んだときに励ましてくださったのは、さっき言っていた「おかん」というのはお母さんのことですよ。お母さんとそれとお兄さん。それと誰がおられるのですか。

○常石 勝義 あとやっぱり愛馬でしょうね。その存在はでっかいと思います、僕は。

○質問者A お二人以外には誰か。家族は。

○常石 勝義 兄と母しかいないので、僕は。

○質問者B お伺いしたいのですが、落馬されたときに重篤になりましたよね。その後、乗馬す

るときに怖くなかったですか。多分私だったら、とても怖くて、いくら好きでも乗れないかなって思っただけです。怖くなかったですか。トラウマになるとか。

○常石 勝義 なかったですね。それはお医者さんも「何でかわからへん」って言うんです。乗馬用の馬ってすごく賢いんです。絶対、人のことを蹴ったりしないし、かみついてきたりもしないです。僕は競走馬から入っているから、本当の馬っていう存在を間違っていたのですが、そうして乗馬に入って馬の賢さに気付きました。

○質問者B 例えば、二度落馬されましたよね。一度落馬されて、また乗馬されましたよね。二回目落馬されましたよね。そうすると本当に乗るのが怖くなかったですか。

○常石 勝義 怖くないんですね、不思議と。僕にできるのは馬に乗ることしかないって思っちゃったので。入院しているときから早く馬に乗りたいて言っていたくらいなので。やっぱりすごく好きなんですよ。

○常石さんの母 ちょっとわたしから補足したいと思います。二回目に落馬して症状固定ということで、三か月ごとに病院を替わらないといけなかったんですね。小倉で落馬したので、小倉で三か月になる前に、京都に替わって、転々として最後に滋賀県にもどったときに、ある程度元気に歩けるようになっていたのですが、外には出られなかったんです。記憶を呼び戻すために車椅子に乗って乗馬クラブに行っただけです。坂道だったので歩けないから車椅子で行ったのですが、すぐによいしょって三人掛かりで馬に乗せてもらったら、馬の上で馬上体操というのをやるんで

すね。歩けないのに手綱も持たないのに、馬の背中に寝転がったり、両手を離して、回したりとか、鏡（あぶみ）も踏めないのに馬の背中に乗っているだけで、いろんなことができたんです。それを見て、「あっ、彼は馬に乗ることしかできないんだなあ」って思いました。その乗っているときに本当に最高の笑顔だったんです。だから、今でも馬に乗ると顔が変わるんです。ちょっと今はぶすつとしていますが、馬に乗った瞬間、最高の笑顔になるんです。だから家を売れと、「何言うてんの」って言ったのですが、「じゃあ、あんたが稼いだお金だから、もう好きに使って」っていうことで、今それ以上にお金が出てしまつて大変なんですけどね。本当に彼、馬に乗ることしかできない。馬に乗っていたら、機嫌がいい。降りた瞬間、機嫌が悪くなる。そんな性格をしています。その証拠にこれだけが自慢なんです、（鞭を見せる）これ鞭（むち）です。お箸も持てないのに鞭を回せたんです。

○質問者C 今日の話、ありがとうございます。私も高次脳機能障害を持つ当事者なのですが、常石さんがいろんな難しい障害が出てしまったことで、落ち込んだりもされたとおっしゃってたんですが、またこうやっていろんな努力をされながら、頑張っている姿を見て、すごく励まされました。具体的に漢字の練習をされたりとか、バランスの身体トレーニングをされたりして、素晴らしい、がんばっていらつしやるなって感じたのですが、そういったことはご自分でこれが大事だと思つてされているのか、どなたかアドバイスをくださる方がいらつしやつたのでしょうか。

○常石 勝義 そうですね。最初に入院した病院でリハビリをしたのですが、「一足す一は二」

のレベルの計算問題を間違っていたんです。左半側空間無視も入っているから、記号とか数字が見えないんですね。そんな小学校一、二年生の問題を間違えるなんて、自分がすごく情けなくて、これももっと勉強を頑張らないとあかんなと思いました。小学校三年生の問題集を買ってもらって、リハビリとしていつも自宅ですべてやっています。やっぱり小学生の問題ができないって、すごく情けない大人だと思ったから、やったんでしょうね、僕には子どもはいないのですが、いつか子どもができたときに「お父さんは情けない」と言われたくないので、本当にがんばろうと思いました。

○質問者D 今日はどうもありがとうございました。私には七歳の子どもがいるのですが、五歳のときに病気になりました、母親がしっかりしていないといけないのですが、すごく落ち込んでしまつて、しんどいときがすごくあるのですが、家族の方とかはどんな感じだったのですか。どんな気持ちだったのですか。

○常石 勝義 やっぱり母には、息子がこんな障害になって申し訳なかったと思いました。お医者さんは、脳を傷めてしまったものは、元に戻らないって言うんです。だから、後ろばかり見ているも仕方ないんじゃないかと思うんです。勉強などもっと頑張ったら、人の脳もどんどん良くなつていくはずだと信じて、後ろは向きたくなかったですね。前しか向きたくなかったです。こういう性格なんで、後ろを向くっていうのがすごく馬鹿らしくて、もっと勉強して、けがする前よりも絶対賢くなつてやろうって強く思いました。そうやってとりあえず、前へ前へと向いて

いくしかないなんて思うんです。

○質問者E いい話をありがとうございます。私もスポーツ好きで、長年バレーボールとかマスタ陸上をやっているのですが、やはり今でも騎手で事故は結構多いのでしょうか。

○常石 勝義 そうですね。競馬って落ちたらこういう障害になったりします。過去に落馬された福永洋一さんにも、たまに会いに行くのですが、やっぱりまだ立ってず、ずっと車椅子生活なんです。息子さんの活躍を見てすごく元気をもらっておられるみたいです。

○常石さんの母 脳に障害があると、「俺は障害者やねん。だからしゃあないねん」って言うのだったらやめなさいっていつも言っているんです。「勝義、左手上げて」って言われたら上げられるんです。でも、自分から上げるのが意外とできないんです。脳の働きが悪くて、麻痺しているので、脳挫傷とくも膜下と硬膜下と三か所出血しているのです、結構自分で判断するのは難しい。周りの人は、「私もよく、もの忘れするから」って言われるけど、違うんです。彼は忘れるのではなくて、脳が働いていないので入ってこないんです。こないだお会いしたでしょって言っても、「あんだ誰」なんです。私のことも「おかん」か誰なのかわからない。だから、アルツハイマーと高次脳機能障害の症状はよく似ているのですけど、違うんです。彼の高次脳機能障害は時間がかかるけど、ゆっくりゆっくり同じことを何度も言うのと、ちよつとずつ入っていくんです。

競馬会の人に「お母さん、これだけ生きるか死ぬかの状況で、涙一つこぼさないんですね」って言われたんです。でも「泣いたら治るんですか」って聞いたんです。また、「お母さん強い

です」って言われて、強くないけど、強くないならざるを得ない。私が一番心掛けていたことは、「お母さん大変やな」って言われても、「いや、大変じゃない」って言うんです。私が早く楽をしたいから、自分の好きなことをしたいから、彼の犠牲者になりたくない。「彼がおるから私は何にもできない、私はしんどい、私は大変や」って絶対言いたくないんですよ。彼は四十四歳になつて、まだ結婚していないから、もしできたら結婚してもらいたい。だから彼にいろんなことを教えたりしているのですが、私はものすごく厳しいです。自分が七十二歳になつても自分の好きなことをやりたいから、彼に一生懸命やらせる。だから彼の犠牲にはなりたくない。「もうあなたがいるから私は何もできません。私はしんどい、なんで私だけがしんどい思いをしないとあかんねん」とは、絶対に言いたくない。そういう気持ちでぶつかつて一緒に巣立つ。あなたとわたしも一緒に勉強して行きましょうと。

とにかく彼に何かをしてもらうために自分も何かをする。一緒に何かをする。そういうやり方でないと、この子を何とかしようと思うと、自分も、皆も壊れるから、自分を強く持つて、本当に厳しくしています。出来なかつたらやめたらつて言っているんです。とにかく毎日すごく厳しいです。朝ご飯も自分で作る。食べたなら自分で食器を洗う。出かけて帰つてきても食べたものを残していたら、そのまま放つておきます。だからとても厳しく育てています。自分が楽をするために（笑）。皆さんがんばってください。ありがとうございます。

○司会 本日ご講演いただきました、常石勝義さんにもう一度大きな拍手をお願いします。（拍

手)

○常石 勝義 ありがとうございます。

○司会 二〇二一年度の第一回「生きること」は、これで終了させていただきます。本日はありがとうございます。

